

「戦後も五十七年を経
て、次の段階が何かを皆が
求めている。でも、戦後が
何であったかについての認
識が共有されておらず、議
論が空回りしているのでは
ないか。今後を考えるため
にも、それを整理する必要
があると考えた」

慶応大助教授の小熊英二
さんの「千ヶ」近い大著であ
る。丸山真男に始まり、竹
内好、吉本隆明、鶴見俊輔
へと続く「戦後思想」の系
譜を、戦争体験との距離に
基づく言語体系の変奏とし
て叙述する力作。「個々の
思想家を自分の視点で裁断
するのでなく、戦後思想の
流れを一つの全体として描
き出したかった」

小熊さんは戦後を、敗戦
後十年の「第一の戦後」、
一九六〇年代以降の「第二
の戦後」、そして九〇年代
以降の「第三の戦後」に分
ける。論考の軸になるの
が、時代の転換の中で「民
主」「愛国」「近代」「民族
」といった言葉にどんな意味
が与えられ、どう変化して
いったかという視点だ。
例えば丸山真男、大塚久
雄らに代表される「第一の

著者と語る



<民主>と<愛国>

小熊 英二さん

戦争との距離で違い

戦後においては、「愛国」
という言葉は「民主」とと
もに、敗戦後の日本が目指
すあり得べき社会の理念と
して、革新的心情が託され
た概念だった。「敗戦直後
の知識人の文章は真摯(し
んし)で力強く、今とは別
種(しゅ)のナショナリズムが求め
られていたことが分かる」
それが「第二の戦後」と
なり、高度成長の進展とと
もに、「愛国」は保守派の
概念へと回収され、戦後民
争の記憶は次第に形がい化
え見詰めていきたい」

「私」優先の論理は、丸山
ヨナリズムが語られる今
を、どう見ればいいのか。
「戦争のような共通体験が
ない現在、ナルシスティッ
クなナショナリズムがまん
延している一方、多数派の
人々は潜在的な心情を表現
していない。それがどんな形
を取るか、この研究を踏ま
え見詰めていきたい」



おぐま・えいじ 1962年東京都生まれ。著書に
「単一民族神話の起源」「インド日記」など。
「<民主>と<愛国>」は新曜社刊、6,300円。